

はじめに

鍼灸治療は、術者の手を媒体として宇宙の偉大なエネルギー（サムシング・グレート）を、鍼をつかい、灸を施し、病体を健康体へと導くことにある。

そのために、体表観察は重要なウエイトをしめる。

ともすれば、手に触れることのできない「見えない気」の世界で語られているために、再現性のない非科学的な医学だといわれているが、津液を中心に観察することで、「見えない気」から手に触れることのできる「見える気」にすることができるのである。そして、五臓六腑・気血・津液の変動を観察し、衛気営気の手法に結びつけるのが、体表観察の目的である。

鍼灸治療において体表観察、特に腹診と背候診が発達しなかったのには次の理由が考えられる。

- ①体表観察は、経絡経穴の虚実反応が直ちに治療点となるために、証決定につながらなかった。
- ②体表観察から病理、精・気・神の状態や気血津液の変動による病態を推理する学習が欠けていた。
- ③経絡治療は「気」一元論で語られ、傷寒論系の腹診にみられるような治法の指示がないために立証性にかけ発展しなかった。

そこで、証決定を確実なものにするため、病態が送り出す数々のサイン（気・血・津液の変動）を体表観察でとらえ、四診法との整合性を図り、衛気営気の手法につなげるための研究を、臨床を通して行うことにした。

I 体表観察の心構え

1. 正しい姿勢で臨む

自然体であること。穴所に対して正しい位置に立つことが必須要件である。（これに関しては、実技に譲る。）

治療時の姿勢によりその治療家の力量がわかるといっても過言ではない。

2. 補の手、やさしいところで臨む

温かく、やわらかく、やさしい手であること。

冷たく、硬い手はそれだけで瀉法になる。

衛気営気（陽気）をおぎない精気を充実させて、生命力強化を図ることを目標とする。

3. 衛気営気の手法につなぐための目的意識を持って臨む

気血津液、臓腑経絡の変動は必ず体表（ツボ）に現れる。

4. 患者の姿勢にも気をくばる

患者がベットに、自然にゆったりと仰臥した状態でなければ正しい診察が行われない。ただし、最初の姿勢は病態の判断につながるので注意して観察する必要がある。

5. 術者の精神状態の安定はもちろんのこと、患者の精神状態にも気をくばる

眼の動きや輝きなどから患者の精神状態をうかがう。

II 具体的観察法

1. 虚実の判定

寒熱、滑しよく（洪）、湿燥、硬軟、圧痛（拒按・喜按）、汗の有無を観察する。

2. 比較対照部位をもって臨む

表裏、上下、左右を比較しながら観察する。

局所にこだわり全体を診ることを忘れないように注意する。

3. 前腕、下腿の五行穴・五要穴は経絡変動の観察に適す

尺膚の観察、足三焦経の観察（後述）。

4. 他の診察法（脈診及び望診・聞診・問診）との整合性を観察する。

Ⅲ 津液の状態を観察する。

1. 体表観察を的確に行うためには津液の概念が重要である。

津液は経脈外では気と親和性をもち、経脈内では血と親和性をもち、したがってその病理変化は経脈外では水毒となり、経脈内では血行障害をひきおこし悪血（オケツ）となり、それぞれ肝病症を呈するのである。

つまり津液は気と血の間に位置して、気血を生理的に運行させる物質であるとともに邪水、悪血などの病理産物となりうるものである。

- ・ 津液（生理物質）は流動的で気血の運行を促進する。
- ・ 水（病理物質）は体内で停滞し、気血運行の妨げとなり、生体に悪影響を及ぼす。

2. 滑・しょく（渋）・潤・燥を比較して、津液の気血との併合を診る。

- ・ 滑潤は、津液が気血と併合している。
- ・ しょく・渋・燥は津液が気血と分離している。

3. 寒熱により津液の過不足を診る。

- ・ 寒は津液過剰。
- ・ 熱は津液不足。

4. 津液と衛気・営気の手法（補瀉）の関係。

津液は衛気営気（気・血）推進の原動力となるために、津液を中心に観察する。

・ 衛気を補うことにより、津液は陽（表）にむかい、気の働き（皮毛を潤す、ソウ理の開闔、肌表の防御、外邪と闘争など）を促進する。

・ 営気を補うことにより、津液は陰・裏に向かい、血のはたらき（経脈運行の中心となり筋・脳髓・骨髄・臓腑・関節などを潤す）を促進する。

5. 津液と汗の関係を診る。

津液のうち、津の汗はサラサラで、自汗という。液の汗はネバネバで、盗汗という。

- ①自汗—気虚・陽虚—衛気の補—精神疲労、気力減退、息切れなど。
- ②盗汗（寝汗）—陰虚—営気の補—不眠、手足のほてり、口や咽喉の渇きなど。
- ③頭汗—陰虚・陽実—営気の補・衛気の瀉—上焦の邪熱、中焦の湿熱など。
- ④外感熱病の場合、無汗は表実、有汗は表虚。

Ⅳ 体表観察による気血・津液と臨床

1. 尺膚診（十三難、靈樞・論疾診尺篇参考）

十三難の尺膚診は色・脈・皮膚の相応不相応について論じたものであるが、これを気血・津液のレベルで観察する。

〔〕 相応の色・脈・尺の表 〔〕

臓（五主）／ 色／ 脈状／ 尺膚の状態（気血・津液の関係）

①肝

筋／ 青／ 弦・急（弦）／ 筋緊張・艶無（血・津液）

②心

血脉／ 赤／ 浮・大・散（洪）／ 外感熱感

③脾

肌肉／ 黄／ 緩・大（緩）／ 緩もしくは緊（気・血・津液）

④肺

皮毛／ 白／ 浮・しょく・短（毛）／ 燥・渋（気・津液）

⑤腎

骨／ 黒／ 沈・濡・滑（石）／ 滑で潤い無（津液）

2. 腹診（難経・十六難・五十五難）

①肝—部位は臍（陰交穴）から左で、下は少腹・恥骨上部まで。上は肋骨弓まで。おもに血と津液の変動が現れる。軽按で血・衛気のバランス（ソウ理のつや・硬さ・粗さなど）をうかがう。重按により軟弱で虚しているものは陰虚。重按で硬結、血滞は悪血をあらわすものであり、拒按を呈する。

②肺一部位は臍（水分穴）から右で、下は少腹・恥骨上部まで。上は肋骨弓まで。おもに気と津液の変動があらわれる。軽按で気、津のバランス（ソウ理のつや、やわらかさ、こまかさなど）をうかがう。重按で浮腫性、抵抗と軽い圧痛をうかがう。

③脾一部位は臍上（左右上下）。気血津液ともに観察対象となるが、おもに津液の状態から心下痞硬、浮腫性、抵抗、痰飲、食塊などを観察する。

④腎一部位は臍下任脈を中心に、左右少腹・恥骨上部まで。おもに津液の状態を観察するが、ここは、命火（三焦の元氣）が位置するところであるために、深淺における寒熱を比較する。重按で力無く冷たいものは陽虚である。

以上、いずれの部位においても、寒熱、硬軟、潤燥、粗密（ソウ理の粗さ・細かさ）などを比較対照して観察する。

3. 背候診

①腹証と相対して観察する。

②背診で最も重要なものは督脈経（脊診）である。

③膀胱経第一行（裏腎経）は急性、慢性ともに反応顕著。診断即治療点。

後頸部—硬結の現れやすいところで肝・胆経の変動が多い。

肩甲間部—正中は急性（熱）、外側は慢性（寒）の傾向で肺・肝経の変動が多い。

腰臀部—硬結、悪血が多い。腹診との相関性を診る。軟らかく結ばれるものは腎虚のことが多い。

4. 足三焦経

①脉位と反対側の足三焦経に気・血・津液の変動が現れる。

②左足三焦経—気・津液の変動が現れる。反応としては虚的反應（ふわふわ・ぶよぶよ）
按圧により抵抗はないが痛みを訴えることがある

反応部位は、下委陽穴（委陽穴の下三寸）に肺の変動。飛陽穴に脾の変動。兪陽穴に腎（命門）の反応が現れる。

治療は、衛気が対象となることが多い。

③右足三焦経—血・津液の変動が現れる。

反応としては、圧痛、硬結、きめが粗いなど。

反応部位は、下委陽穴に心の変動。飛陽穴に肝の変動。兪陽穴に腎の変動が現れる。

治療は、営気が対象となることが多い。

④左右兪陽穴は、水滯が主に現れる。

特に左兪陽穴は、三焦の元氣不足のことが多い。

治療は、衛気営気ともに対象となる。

⑤肺虚肝実、脾虚肝実の反応について

肺の反応部位は軽按では、虚しているが重按すると患者は逃避するほどの痛みを訴えるが、「すこんつ」と抜けた感じで硬結などの反応はない。

脾の反応部位は、軽按では虚しているが、重按では軽い抵抗と圧痛がある。

心および肝の反応部位は、圧痛、硬結ともに顕著である。

⑥膝関節、足関節の硬軟やかたむきの観察も臨床上重要である。

膝関節、足関節ともに硬く動きの悪いものは、血の変動のことが多い。

伏臥位で下腿内側（三陰経）がベットにつき、足先が外側に開いているものは、陽虚（三焦の元氣不足）のことが多い。

⑦足三焦経の診察は、伏臥位で行われるために、脉診や腹診と比較できないのが課題となる。

おわりに

見えない「気」を治療対象とする経絡治療を、診える「気」を対象とする漢方鍼治療にするために、津液の概念が重要であると主張してきた。そして、その見方は間違いでないと確信している。しかし、漢方用語大辞典の文言に眼が止まった。

気とは、「体内を流れている栄養に富んだ精微物質で、たとえば水穀の気などをさす」とある。

つまり、体表観察では「気」は衛気営気そのものであり、体表に触れた瞬間から衛気イコール気・津、営気イコール血・液として認識することにより難経医学の主張する衛気営気論、三焦論が見えてくるのである。

漢方鍼治療を、より確実なものとするために今後の課題として、さらに一步踏み込んだ「気」の学習が必要であることを痛感する次第である。

以上

《参考・引用文献》

『現代語訳・黄帝内経霊枢』 南京中医学院中医系 東洋学術出版社

『漢方用語大辞典』 創医学会学術部編 燎原

『漢方鍼医』 漢方鍼医会編

『難経の臨床研究』 勝浦甚内著

『難経本義大鈔』 森本昌敬斎玄閑著 漢方鍼医会編